救世軍の社会事業と山室軍平・（その２）

三　吉　　明

序
1．日露戦争と救世軍社会事業
2．慈善鍋と大学植民館
3．公娼全廃論
4．米騒動と関東大震災
5．日華事変と救世軍
結
（その１）（前号）
序
1．石井十次と山室軍平
2．濃尾の大震災
3．In Darkest England and the Way Out.
4．救世軍社会事業の草創期
5．社会問題とキリスト教
6．慈善事業と社会事業
結

序

わが国で「社会事業」という言葉が一般化したのは、大正時代の初期で、全国慈善事業大会が、全国救済事業大会となり、さらに大正９年（1920）の第５回大会から、社会事業大会に改められたのであった。ところが救世軍においては、明治33年（1900）８月１日刊の『ときのこゑ―婦人特別号』に、すでに社会事業の字句を用いているのである。

これに対して守屋茂氏（竜谷大学教授）より、仏教関係では公式使用は明治44年（1911）、東京の仏教徒社会事業研究会ではなかろうか(1)との御教示をいただいた。ありがたいことである。

いづれにせよ、字句として最初にこれを消化したのが救世軍であるばかり

でなく、出獄人救済所（東京・明治29年10月）につづいて水夫館（横浜・明治30年）、醜業婦救済所（東京・明治33年８月）と、いわゆる院内救助をおこなったばかりでなく、救世軍が萬国本営から、日本へ派遣されて、その第１回の集会が神田区美土代町の基督教青年会館で催されてから（明治28年９月22日）、僅か９カ月しかたっていない明治29年（1896）６月には、宮城県下の大海嘯による被災者救援などの院外活動を実施しているのである。(2)

いわば当時のわが国において、慈善事業あるいは救済事業とよばれていた時代に、全く新しい分野に、新たな方法をもって、次々に困窮者救済の活動を開始していったのが救世軍であったのである。

以下順を追って、前編（北星論集第８号）に引続き論述してみたい。

(1) 社会事業研究会『仏教社会事業大観』　同会刊　大正９年
(2) 山室軍平著『救世軍略史』　救世軍出版及供給部　大正15年

１．日露戦争と救世軍社会事業

救世軍社会事業のうち、特筆すべきものに「救世軍愛隣隊」がある。わが国における友愛訪問運動（friendly visiting）の嚆矢である。

これは女士官、女兵士をもって編成し、毎週３時間以上、家庭訪問をおこなうのである。『ときのこゑ』（明治35年12月第168号）よれば、その目的は、

１．労働者の家庭にある婦人にて、児育内職その他の為に外出の機会なきものを、その家に訪問すること。
２．又右の如き家庭にある病人を訪れ、慰め得べくばその看護をも手伝ふこと。
３．手当の行届かざる病人の為め出来得る丈け医薬を得るの途を立つること。
４．病院の入院患者を訪問すること。
５．不幸災難に遭へる人々に慰籍と忠告を与ふること。
６．殊に非常の困難に陥れる人々には出来得る丈の助を与ふること。
７．又古着類など集め、身を掩ふ物さへなき人々に頒つこと。
８．熱心もて未信者を救に導き、取分け種々の事情のため外出し能はざる人々を救はんために尽力すること。
９．既に救はれては居れ共、集会に出席し得ず、その他霊魂上の助を身

に得難き事情の下にある人々に、霊魂上の助と奨励を与ふること。

10. 救世軍の出版物を頒布し、殊に愛隣隊が助を仮さんことを願ふ人々にときの声その他の印刷物を読ましむること。
11. 恥づべき生涯に陥らんとする婦人を発見した時は、之を未然に救済すること。
12. 正業に復せんことを願ふ娼妓の父兄ある時は之に助力すること。
13. 廃業したる娼妓がその後清き生涯を送り、堅気に世を渡るに必要なる忠告と助を与ふること。
14. 密娼を営む婦人にしてその不正業をやめ、清き生涯に入らんことを願ふ者を助けるしむこと。
15. 夫婦・父子・親族・朋友の間に不和合のことある者に遇ふ時、之が和解に勉むること。
16. 頼辺なき孤児の落着先を周旋し、又凡ての児童が少年軍集会に列り、その他霊魂上に好き感化を受くるやう、取りわけ教へ、躾なき児童の為に尽力すること。

であって、各小隊の所在地毎に組織されることになっていた。その実績・効果については、資料を見出し得ないが、この種の活動は他に例をみないのである。わが国の方面委員（現・民生委員）制度が発足したのが大正初期であることを思えば、実に15年も先んじていたのであって、従来の慈善事業が、施設に収容して救済するとする思想に、いわば革命的展開を齎したともいえるのである。それは1819年、スコットランドで牧師チャルマーズ（Thomas Chalmers1780—1847)が実施した友愛訪問運動や、1833年ソルボンヌ大学生オザナム（F. Ozanam 1813—1853)が実施した聖ブインセンチオ・ア・パウロ会（Society of Vincent de Paul）運動がようやく7～80年にして、はじめてわが国に実を結んだことになるのである。

翌明治36年（1903）正月15日には、神田の基督教青年会館で「印半纏会」が開かれた。その頃の職人・大工などの制服は、前に「どんぶり」のついた紺木綿の腹掛を胸から腹にかけて、その紐はともぎれで背中に斜十字に交叉させ、股引をはいて、半被を着て、そのうえから、襟や背などに大きく屋号を染ぬいた袖口のひろい印半纏を着た。これは雇主や親方からもらうもので、日本語の半被と英語の幸福(happy)とを結びつけ、「幸福な労働者の団体」を作ろうとした山室の発案であった。そこにはストライキのやれない、メーデ

ーにも参加できない下層労働者に対する温い目がむけられているといえよう。

この組織の創設は前年7月3日、芝愛宕下の芝小隊であった。(1)それが半年後の新年会には 100種の職業を代表するものが集り、多数の男女学生も参加するほど盛況で、この日は津田仙・留岡幸助などの激励の言葉があった。(2)

山室軍平が、第1回の渡英から帰えってきたとき（明治37年11月）、戦勝の日露戦争の最中であったが、軍人並びに遺家族に対する活動が開始された。

まず『救世叢書』という小冊子六巻を発行し、聖書・福音書・『ときのこゑ』などとともに、これを傷病軍人を病院に慰問して寄贈した。このときの状況は、

『ときのこゑ』配布数	60.907
『救世叢書』その他書籍	16.122
聖書、福音書配布数	1.265

などとなっている。(3)

明治38年（1905）旅順を陥れ、奉天を占領し、日本海海戦ではバルチック艦隊を全滅させた。6月には名古屋に小規模の「臨時軍人ホーム」を設けて、戦地から凱旋する軍人を慰問し、また捕虜になっているロシア兵を慰めるため、ロシア語の福音書5～600冊をもって、習志野（千葉県）・名古屋・金沢・仙台の捕虜収容所に士官を派遣した。(4)

またこの年の春の「克己週間」の献金は、(5)これをことごとく日露戦争に出征中の陸海軍人の家族、殊にその寡婦、孤児救済にあてられることになった。このときの募金額2,000余円を配分するについて、島田三郎・徳富蘇峯・留岡幸助の助言により、当時の軍人遺家族救護にあたっていた全国38団体に寄付したのである。内務省刊の『時局救護事業概観』（明治40年刊）によれば、

> 救世軍が毎年行ふ所の克己週間に於て、各自の用度を節約し、又特別の労工に依る醵金二千余円を以て、宗教の如何を問はず、設立者の何人たるを論ぜず、時局救護団体に寄贈せるが如き、熱誠の見るべきあり。（下略）

と述べているが、まさしくこの点は注目に価いしょう。

明治33年（1900）8月、「醜業婦救済所」を開設しての山室機恵子の活躍

については、既に述べたところである。(北星論集第8号)

日露戦争終結後、明治38年9月上旬から岩手・宮城・福島地方では連日の降雨に早霜という災害をうけ、流離の農民が続出し、婦女子の誘拐、人身売買が目に余る有様であった。しかも醜業婦の激増に対処するため、救世軍では仙台市内に事務所を設け「東北凶作地子女救護運動」を開始した。(6)

1．適当なる士官を現場に遣し、救護を要すべき子女を発見して、之を東京に輸送せしむる事。
2．輸送し来りたる子女は、之を臨時に設置したる所謂女中寄宿舎に収容して保護を加ふる事。
3．女中寄宿舎に収容したる子女は、職業紹介部の士官が斡旋して、然るべき奉公先に在りつかしむる事。

とし、病気静養中の山室機恵子は再び女中寄宿舎（東京市京橋区築地2丁目）を受持つこととなった。明治39年の上半期だけでも

	女	男	計
宮城県	79	18	97
福島県	37	1	38
岩手県	13	8	21
計	129	27	156

と報告されている。(7)

日本鉄道会社は、これに対して乗車賃3割引の特典を与え、内務省はまた地方官庁に協力便宜を供するように達したのである。これはもはや、救世軍が単なる一宗教団体としての活動に留まらないことを示しているといえよう。

また日露戦争が終結することによって、百万人の壮丁が一時に満州から凱旋する。そのなかには必ずや職に就けないものもあるに相違ない。そこで明治39年1月、当時東京芝口2丁目にあった救世軍本営内に無料の労働紹介所を開設した。これは公共無料職業紹介所としては、兵庫県知事の懇請により、賀川豊彦（1888—1960）の尽力によって、神戸市吾妻通4丁目に、兵庫県救済協会生田口入所が開設されたのが大正7年（1918）6月であったから、(8)実に10余年前のことになるのである。まさしくわが国における最初の無料職業紹介事業であった。

しかも労働紹介だけで真の失業救済はできない。監督保護の必要を認めて、同39年末には、神田区三河町３丁目１番地に「労働寄宿舎」も開設した。この地区がいわば失業者の溜の観を呈し、その労働周旋を業とするものが数軒あった。無経験な救世軍がこの地を選んだところにも、必要のためには身命を投ずる情熱のあることを認めない訳にはいかないのである。のちの友愛会の創始者で、当時朝日新聞記者鈴木文治は、この帳場に座り込んで、労働者の実態調査をおこなっている。

明治39年という年は、救世軍の社会事業が目ざましい発展をした年で、１月にはのちの大学植民館の前身「学生寄宿舎」が神田区一ツ橋通町４番地にできるし、春には本所区花町に「箱船屋」ができた。当時の東京帝大学生倉橋惣三は「箱船屋に泊る記」を『ときのこゑ』（246号）に書いている。

> （上略）亀沢町で街鉄を降りて其(そのまま)真直に十丁程で右へ曲る。（中略）軒の瓦斯燈には「木賃はこぶねや」と朱で書てある。がたがたといふ硝子戸をあけて、そこに帳付をしてゐる人に来意を告ると、ここの御主人安久津中尉であつた。（中略）一泊七銭、夏でも冬でも敷蒲団一枚、かけ蒲団一枚といふのが組合の規定であるさふな。（下略）

明治43年８月迄に、ここに来て宿泊したものの数は 27,333人であった。(9)

明治38年（1905）９月14日、満州軍総司令官大山巌（1842—1916）は、全軍に休戦命令を出し、10月17日には早くも関東総督府が設置されて、大島義昌が総督になった。

その頃、軍隊慰問部主事として満州で活躍していた益富政助は、日本内地から誘拐されて満州に来る婦人達を気毒に思い、そのうちの数名を、東京の救世軍婦人ホーム（醜業婦救済所改称）へ送って来たことがある。

YMCAが「軍隊慰労事業」を組織的に開始しようと計画したのは、明治36年11月で、東京YMCA理事長江原素六（1842—1922）や基督教同盟委員長本多庸一（1848—1912）の尽力によるのである。特に前線に出向いて、直接事業に当ったのは益富政助・大塚素らで、韓国及び満州の11カ所に天幕その他による慰労部を設けて活動したのであった。これに対して明治39年５月陸軍大臣寺内正毅から、本多同盟委員長に感謝状が贈られ、天皇　皇后の名をもって１万円が下賜された。これは岡山孤児院に（明治37年、５千円）次

いで、キリスト教事業に対する最初のことである。日露終戦によって、これらの事業が大連にYMCAを設立する契機ともなった。(10)

明治39年4月、大連市浪花町に「満州婦人救済会」を開設した。このとき西園寺首相は満州・韓国各地を視察し、8月1日には関東都督府官制が公布され、軍政行政の総合機関として発足をみた。11月には南満州鉄道株式会社を設立（明治40年4月営業開始）、南満州の利源開発の中心となった。これを機会に9月に、この婦人救済事業が救世軍に引渡されることになり、これが「救世軍大連婦人ホーム」（大連市奥町）の開設である。

そして大連民政署の厚意により、土地の無償貸付けがあり、大連市飛騨町に新築し、また関東都督からは不要となった軍隊毛布一万枚が送与され、これがのちの播磨町に移って「大連婦人及育児ホーム」となったのである。創設以来44年6月末までの5カ年間の取扱成績は、

収容したる人数	644人
内地に帰国、又は父兄に渡した者	194
職業に就きし者	389
自ら職を求めて去りし者	4
病院に送りし者	6
退館を命じたる者	8
不結果	29
現在収容	14

となっている。(11)

救世軍社会事業の、明治39年1年間の主な成績は次の通りである。

出獄人救済所（明治29年、神田区三崎町1）

収容した者42人、就職または父兄に引渡した者31人、成績不良8人、現在28人。

（明治41年10月牛込区赤城下町に移り救世軍労作館と改称する）

醜業婦救済所（明治33年8月、京橋区築地3丁目11）

被保護者32人、就職または父兄に引渡したもの24人、現在22人。

（明治41年麻布区広尾町35に移り、救世軍東京婦人ホームと改称する）

横浜水夫館（明治29年11月、横浜市山下町123）

1年間の宿泊者 3,775人。

（外国水兵・水夫の保護・外国人の失業者・浮浪者、また横浜監獄に入りたる外国人の引取人をしたこともある。明治40年末閉鎖したが、付近住民の要望により、同山下町88に「救世軍外国人ホテル」として41年1月開設した）

神戸水夫館（明治37年4月・神戸市三之宮町）

1年間の宿泊者 6,989人、このほか無料宿泊者 712人、無料給食 1,940人。

箱船屋（明治39年4月、本所区花町）

毎夜平均30人。

（明治43年浅草区黒船町に移り、第二労働寄宿舎と改称した）

このほか第一労働寄宿舎（神田区三河町3丁目）・労働紹介所・女中寄宿舎さらに男学生寄宿舎（神田区一ツ橋）・女学生寄宿舎（本郷区弓町）・横浜労働寄宿舎（横浜市中村町）・幼稚園（明治39年東京麻布）・遊戯所（明治39年東京本所）などがある。

〔註〕 (1) 秋元巳太郎著『日本における救世軍七十年史』第1巻 救世軍出版及供給部 昭和41年
(2) 同上書 第2巻
(3) 山室軍平著『救世軍略史』 救世軍出版及供給部 大正15年
(4) 同上書
(5) 明治29年11月初代の救世軍人の精神を伝承して、わが国で最初の克己週間が守られた。克己（こっき）とは「おのれにかつこと」である。ある士官は朝食を断ち、或いは粥と塩だけで過したり、週間中人力車の利用を節約するなど各人が克己して得た金を献金した。
(6) 山室武甫編『山室軍平選集』 第8巻 同刊行会 昭和28年
(7) 同上書
(8) 遊佐敏彦小伝『汝のパンを水の上になげよ』 同感謝会刊 昭和43年
(9) 同上『山室軍平選集』 第6巻
(10) 奈良常五郎著『日本YMCA史』 日本YMCA同盟刊 昭和34年
(11) 同上『山室軍平選集』 第6巻

2．慈善鍋と大学植民館

明治39年には、救世軍にとって記念すべき行事「年末貧民窟に慰問篭配布」

の実施がある。これは聖書の、

> 午餐または晩餐の席を設ける場合には、友人・兄弟・親族・金持の隣り人などは呼ばぬがよい。恐らく彼らもあなたを招きかえし、それであなたは返礼を受けることになるから。むしろ宴会を催す場合には、貧乏人・不具者・足なえ・盲人などを招くがよい。そうすれば、彼らは返礼ができないから、あなたはさいわいになるであろう。正しい人々の復活の際には、あなたは報いられるであろう。(ルカ伝 14・12)

というキリストの言葉からでたのであって、「誰からも一枚のクリスマスカードや年賀状を受けぬ貧しき人々へ、心ばかりの贈物をするということは、最もキリストの心に叶う行為である」という趣旨による。即ち士官は軍人・軍友によびかけて「慰問籠」を調達して、これを本営へ集めた。

> 金十五銭乃至二十銭を費すつもりならば、立派に一つの慰問籠は出来ると思ふ。何か貧しき家庭を賑はすやうな贈物と共に、『救世軍叢書』又は『ときの声』等を入れ置けば、一時彼等を物質上にて楽しましたるのみならず、亦精神上に祝福することが出来ると思ふ(下略)(『戦場士官』2巻12号)

この密柑籠の中へは手拭・足袋・パン菓子・密柑・玩具・絵本・餅・米・麦などを入れて、当時東京市内の三大貧民地区といわれた下谷万年町・芝網・四谷鮫ケ橋の 1,000戸に配布したのである。(1)

この運動に対して島田三郎の主宰する東京毎日新聞は、金品の受付け並びに寄付者の氏名を、そのつど紙上にかかげて領収証にかえるとともに、慰問籠配付状況についても報告するなど、大いに協力・支援したのである。このことによって一般市民に、救世軍に対する理解を深めるに役立ったことはいうまでもない。

やがて明治42年（1909）の暮からは、三脚に鉄鍋をつるして、道行く人に募金をよびかけた。誰言うとなく「慈善鍋」と称し、東京はじめ他都市へも拡った。大正10年（1921）から「社会鍋」とよぶようになって、今日に及んでいる。(2)

平林たい子が、昭和28年から『主婦之友』に掲載して好評の『砂漠の花』

(光文社・昭和33年刊) は、救世軍の慈善鍋や、大連婦人ホームによって救済された自伝的私小説である。当時の救世軍を知るのに大いに役立つものがある。

明治41年（1908）には、神田区三崎町２丁目11番地に「大学植民館」を開設した。これは先に述べたように(北星論集第8号)、山室のキングスレー館での経験や、ロンドンにおけるトインビーホールなどの見学が大いに参考となったことは、いうまでもない。キングスレー館は片山潜（1859—1933）が、神田区三崎町１丁目に開設したものである。

片山は安政６年（1865)、岡山県粂郡羽出木村の庄屋の次男として生れたが、祖父の家で母の手で育てられた。苦しい農民生活が忍耐と努力を養い、学問で身を立て出世しようと考えるようになった。明治14年（1881）22才で上京、友人から「アメリカは貧乏でも勉強のできる所だ」との手紙をもらい、明治17年25才で渡米、キリスト信者になった。苦学してグリンネル大学を卒業(33才)、ついでM.A(文学修士）となり、さらに神学校へ入学、その間約３カ月間学友とイギリスへ旅行した。在学中主として社会問題を研究、エール大学神学部を卒業（36才）B.D(神学士）となって翌明治29年（1896）足掛け13年振りに日本へ帰ってきた。やがてアメリカで勉強してきた社会改良事業を計画、組合派宣教師グリーン博士が、毎月25円くれることになったので、一軒の家を借りて、キリスト教社会事業の本営としての大学植民事業である「摯真須玲館」という看板をかけて、セッルメント事業を始めたのが、明治30年３月のことである。委員長植村正久、会計丹羽清次郎、館長片山潜、委員横井時雄・伊藤為吉・綱島佳吉・松村介石となっている。

セツルメント（Settlement）運動は、貧民街の貧民教化事業である。ロンドンのホワイトチャペル街の牧師バーネット（Samuel Barnet 1844—1913）が、オックスフォード大学によびかけ、理想主義的社会政策学者トインビー(Arnold Toynbee 1852—1883)が、その先駆的活動をおこなった。彼が夭折したので、それを記念して最初の大学セツルメントをトインビーホールと命名して、バーネットが初代館長となったのである。この運動はやがてアメリカその他各国に拡って、その影響は今日に及んでいる。バーネットは明治24年（1891）来日してセツルメントを紹介し、当時のわが国の社会政策学者たちにも深い感動を与えた。

キングスレー（Chales Kingsley 1816—1875）はイギリスの宗教家、文学者でキリスト教社会主義の代表的人物である。牧師となり、母校ケンブリ

ッチ大学の教授となった。当時のイギリスの労働階級の悲惨な生活状態を赤裸々に示す二つの小説を書いて、広く人々に知られるようになった。片山はこのキングスレーの実践を認めて、それをわが国最初のセツルメントに命名したのである。

キングスレー館の事業は条款に示す通り、(3)付近住民の教化・教育にあったから研究会・クラブ活動・集会などに用いられ、幼稚園で片山は英語を教えたりした。職工教育会は週6回月謝をとって教えた。青年倶楽部も盛んで、幸徳秋水や植松考昭らも参加し毎土曜にはベルリンから帰朝したばかりの、安部磯雄が講師となって、大学普及講習会を開き、特にグリーン博士の聖書講義は熱心な人々が出席した。またクリスマスも盛大におこなわれた。このほか、婦人対象の西洋料理の教授もした。今日の母親教室のことである。キングスレー館で最も成功したのは渡米協会で『渡米案内』は一週間に 2,000冊も売れ、渡米の問合せが殺到したということである。(4)

これに対して山室は、救世軍の「大学植民館」では、片山がセツルメントを「大学植民事業」とよび、「大学の人士貧民間に居住して、之と苦楽を共にし、其受けし処の高等教育の趣味を分与し之を味はしむる」ものとする趣趣旨に立脚して、(5)

> 青年学生の為めの信用すべき模範寄宿舎であると共に、一面に於ては貧民又は労働者等の階級の為めに力を尽す所の機関。(6)

とし、40余人を収容する寄宿舎は低廉な料金で、懇切な待遇をした。舎生に対し毎日曜の朝、ホッダー少将夫人の英語の聖書講義、吉田清太郎牧師の「身上相談」のほか、午後は講堂で山室大佐の宗教上の集会を開き、また「職工青年会」の集会を催した。そのほか地域住民に対し「貧民法律顧問部」を設け、専門家並びに法科大学生が相談に応じた。その成績 (41.11~44.6)

民事に関するもの	106件
刑事に関するもの	23
その他	18

また「貧民医療部」を設け、その成績 (42.12~44.6) は、救療延 1,188人に及

んだ。これがやがてのちの「救世軍病院」への動機ともなったのである。

大正2年（1913）2月、三崎町から火を発し、神田の目抜き通り二千数百戸が焼失した。しかもその火元が救世軍大学植民館からとの風評が立った。山室は直ちにペンをとり「罪を天下に謝す・神田の大火に就て」の文章を、市内各新聞に発表するとともに各所へ配布した。警視庁の調査では判然としないが、植民館ではなさそうであるということになった。この事業は山室の最も期待した事業であったが、再建されず僅か5年で終った。

これに対して、親友賀川豊彦は、『貧民心理の研究』（警醒社・大正4年）のなかで、救世軍の活動について批判しており、『精神運動と社会運動』（警醒社・大正8年）でも、

> つまり救世軍が今日東京で、やつてゐる様な愛隣館式のものを、も少し教育ある大学卒業生が総がかりでやるのが、日本で先づ発達すべき殖民事業であらう。救済の根底に触れること誠に遠いが仕方がない。

とも書いているのである。

〔註〕 (1) 前掲選集　第6巻
(2) 秋元巳太郎『山室軍平の生涯』　救世軍出版供給部　昭和26年
(3) 吉田久一「社会事業と労働運動の分岐・片山潜の場合」　社会事業研究所編『社会福祉研究第6集』　昭和29年
(4) 隅谷三喜男著『片山潜』　東京大学出版会　昭和35年
(5) 同　上
(6) 前掲選集　第6巻

3．公娼全廃論

江戸時代の初めまで遊廓というものはなかった。集娼地の発生は元和3年（1617）で、吉原遊廓地の誕生は明暦3年（1657）といわれる。（台東区役所編『新吉原考』）

吉原・新吉原時代には娼妓の年令は16才からで、身代金は百両が相場であったという。しかもその大半は女衒（ぜげん）（周旋人）の手数料と抱主の支度料に取られて、娘を売った親許へ入る金は僅かなものであった。

徳川期に廃娼を実施したのは、寛政7年（1795）米沢藩が湯野村（赤湯温泉）の遊女を解放したのが、わが国の最初といわれ、嘉永6年（1853）に彦

根藩で、慶応3年（1867）には長岡藩など廃娼記録はこの3件に過ぎなかった。明治2年（1869）津田真道が、太政官に対し「婦女売買不可論」の建白書を提出している。これが明治以降における公娼廃止提唱の第1号であった。

それから間もなく明治5年（1872）6月、横浜にマリア・ルーズ号事件が起り、これが「公娼解放」の動機となった。（この経緯については小倉襄二著『社会保障と人権』（汐文社46年）に明らかである。）その結果が同年10月「娼妓解放令」（太政官布告第295号）となった。

1．人身ヲ売買シ終身又ハ年期ヲ限リ其主人ノ存意ニ任セ虐待致候ハ、人倫ニ有ルマジキ事ニ付、古来禁制ノ処、従来年期奉公等種々ノ名目ヲ以テ奉公住為致、其実売買同様ノ所業ニ至リ以テノ外ノ事ニ付自今可為厳禁事。

1．農工商ノ諸業習熟ノ為メ弟子奉公為致候儀ハ勝手ニ候得共期限満七年ヲ過グベカラザル事、但双方ノ相談ヲ以テ更ニ期ヲ延ルハ勝手タルヘキ事。

1．娼妓芸妓年期奉公人一切解放可致右ニ付テハ貸借訴訟総テ不取上候事。

しかし娼妓を解放しても遊廓とその営業を禁止したものではない。まして解放後の彼女たちの転身更生については何らの措置もとられてはいなかった。ことにその頃は維新後没落の幕臣や御用商人たちの娘など、才色兼備の花魁（おいらん）も多かったのである。新吉原の再三の嘆願もあって、翌6年12月に「娼妓渡世規則」「貸座敷渡世規則」などが出て、自由意志で売春を業とする女に、便宜上場所を貸与するのだという偽装をし、人身売買も「前借」という貸借関係の形式にするなど、解放令は全くの骨抜きにされてしまった。

1877（明治10）年、スイスのジュネーブに15カ国代表が集まり、公娼絶滅の決議がなされた。この年、埼玉県令は県内の公娼と遊廓を厳禁し、ついで和歌山県も公娼を廃止した。明治15年（1882）4月、群馬県会で公娼廃止が可決されたが、実施が延期され、ようやく明治27年から実施となった。明治21年1月、高知県でも公娼廃止が可決されているが、しかし間もなく埼玉県・和歌山県ともに、廃娼県としての名誉を返上してしまっている。

明治24年（1891）10月、濃尾地方に起った大地震が、わが国の社会事業発

展史上に、大きな影響のあったことについては、先に述べたが（北星論集第8号）、同時に罹災者のなかから、全国でも最も多い娼妓の産出地となった。これが契機となって、婦人矯風運動の全国組織へと拡大していくのである。(1)

その頃、名古屋にいたモルフィの許に、英語を習いに集って来る青年達が、いつしか不勉強になるので、その原因を調べてみると、そのほとんどが遊廓へ行くためであった。これが彼の廃娼運動の動機である。そこでその頃実施されたばかりの日本民法（第1.2.3編明治29年 第4.5編同31年）の研究を始めたが、その第九十条に

公ノ秩序又ハ善良ノ風俗ニ反スル事項ヲ目的トスル法律行為ハ無効トス

とあるのを知り、娼妓の自由廃業は可能であると信じた。たまたま北海道函館の娼妓坂井フクのことを知った。それは彼女が廃業を望んだことにある。

ところが娼妓の廃業届には必ず抱主とその遊廓取締役（三業組合長）の連署捺印が必要なのだが、それを得られない限り警察でも受付けない。そこで彼女は函館地方裁判所へ、廃業届書に調印請求の訴訟を起したが、第一審で敗訴した。さらに函館控訴院へ控訴したがこれも敗訴に終った。なおも大審院まで上告したところ、原判決を破毀して函館控訴院に差戻しとなった。そしてついに第四審において、

娼妓ガ其楼主ニ対シ一定ノ年間一定ノ場所ニ於テ娼妓ヲ営ムベキ旨ノ契約ヲ締結スルハ無効ナリトス

と判決し、およそ1年の戦いの結果彼女はついに勝利者となったのである。これこそ娼妓の自由廃業を認めた最初の尊い判例となった。(2)

そこでモルフィは公娼自由廃業可能の運動を起すことになり、直ちに明治33年3月、1人の娼婦のために訴訟を起して勝訴となった。また同年4月号の『中央公論』が、これを支援し、さらにまた島田三郎らの「廃娼同盟会」の組織をも報じて与論の喚起につとめた。

わが国の廃娼運動史の第1期を明治初年から6年まで、第2期をそれ以後26年まで、第3期をそれ以後とすれば、島田三郎は第2期における中心人物で、明治44年に「廓清会」を組織し会長となった。(3)

このような与論に、明治33年5月、内務省は（訓令第173）、娼妓の年令16才を、

18才以上に繰りあげ、人身保護・伝染病予防のため、1日に2人以上の客に接しめない事、1日3時間を裁縫その他の実務を習得せしめることなどを定めた。

モルフィは全国の遊廓や娼妓・密淫売婦の調査をおこない『社会道徳に関する統計表』(明治32年刊) と題する冊子を出している。それによると、

娼妓及密淫売婦（全国）

明治29年	39,079人
30	47,055
31	50,553

其の最も多きは東京・大阪・北海道なり。三重の如きは40ケ所以上の遊廓地あり。娼妓の三分の一は私生児（此の内芸妓の私生児を含む）と養女にして、1人の娼妓は平均毎夜1人乃至3人の客に接する割合。東京遊廓地にて毎月の遊客平均25万人、費消金30万円、昨31年1月は客数302,878名、378,871円。全国では毎月遊廓地で 250万円以上。密淫売は全国8万名以上。大阪最も多く、東京は 5,000人位。

芸妓及妾は全国で

明治30年	27,532名
31	30,386

全国の不潔婦

妾1万人、娼妓5万人、芸妓3万人、密淫売8万人、総計17万人。現在満15才より満35才迄の婦人数 690万人。40人につき1人の不潔婦の割合となる。

自由廃業はできるとしても、問題はそれから先のことである。モルフィを喜ばせたのは、それを救世軍が引受けてくれることとなったことであった。

明治33年8月1日の『ときのこゑ』（第112号）が特別号として廃娼運動の烽火をかかげ、東京各小隊はそれぞれ手分けをして品川・新宿・洲崎・新吉原・板橋・千住の遊廓へ配付し、暴力団に襲れながらも、廃業者が続出す

るに至った。山室もまた洲崎遊廓で前頭部に重傷を負い、その傷痕は生涯消えなかったのである。この時の運動が「醜業婦救済所」の開設となったのであって、そのことについては書いた。（北星論集第8号）

明治44年（1911）4月、吉原遊廓が全焼し、その焼跡から逃場を失って焼死した娼妓の死体が酸鼻を極め、「吉原遊廓再興反対」の運動となって、やがて「廓清会」の発足となった。7月には海嘯による深川洲崎遊廓が倒壊してまたまた多数の娼妓が死亡した。つづいて翌45年には大阪市南区難波新地の遊廓 142戸が全焼し、廃娼運動が再燃した。これが伊藤秀吉の『日本廃娼運動史』による第4期で、大正5年（1916）飛田遊廓の新設反対などの運動期にあたる。

山室軍平は吉原遊廓全焼の15日後に書いた『公娼全廃論附吉原善後策』（警醒社刊）で、廃娼運動が、今や自由廃業から公娼制度そのものの廃止を叫んで展開されたのである。さらに山室は廓清会の機関誌『廓清』などにも筆鋒鋭い論陣を張るばかりでなく、各所の廃娼運動の先陣に立ち、熱涙をもって訴えたのである。

〔註〕 (1) 三吉明著『山室軍平』吉川弘文館　昭和46年
(2) 沖野岩三郎著『娼妓解放哀話』中央公論社　昭和5年
(3) 生江孝之著『日本基督教社会事業史』教文館　昭和6年

4．米騒動と関東大震災

明治40年（1907）4月、ブース大将が来日、40日間に亘って東京をはじめ前橋・宇都宮・仙台・横浜・名古屋・大阪・京都・神戸・岡山の順に歴訪した。このことはわが国の救世軍の発展期を齎し、(1)同時に山室軍平の力量・人物を周知せしめるのにも大いに役立った。この来日記念が、慈善病院の設立である。ブース大将は基金5万円をこれに贈り、また国内では大隈重信・清浦圭吾・渋沢栄一・尾崎行雄らが中心となって観劇会を催すなど募金を図り、下谷区仲御徒町3丁目45に、明治45年6月「救世軍病院」が開設された。院長・副院長のほか付属士官1・女医3・看護婦4・調剤員1・雇2で、その特色は昼間のみならず夜間も外来患者の診察をし、また巡回救護を組織して、貧民地区の訪問診療をおこなったことである。満1年間の成績をみると、(2)

外来新患	2,623人
施療患者	831人
巡回救護	21,406戸
巡回治療患者	321人
貧病者に衣類	111人
同上　　食物	42件
同上　　助産	9件
結核新患	370人

これをみても救世軍病院の活動は、いわゆる今日の病院と甚しく異なる。特に結核患者を重視しているが、これは院長松田三弥の専門というばかりではなく、当時の不治の国民病でもあり、のちの結核療養所設置の布石でもあったからである。

また明治45年夏には、米価暴騰のため「白米慈善売り」ということをおこなっている。1升23銭位いの白米を仕入れて、これを東京市内小学校3カ所（貧民地区）で、1カ所に3日間、1升16銭という出血売出しをし、その数13,615人にのぼった。これらの基金はすべて慈善家の寄付によったのである。(3)

大正3年（1914）7月第一次世界大戦が勃発した。この年1月、石井十次が宮崎県茶臼原で50才の生涯を終えた。また安部磯雄は『新日本』（富山房刊 4巻11号）に「山室軍平を中心として大正三年の宗教界を論ず」の一文を寄せ

> （上略）救世軍の白熱的信仰と其親切なる社会事業に至りては、何人かこれに対して敬意を表せぬものがあらう。（中略）救世軍は最もよく古代の基督教的精神を発揮して居る。（下略）

と書いている。大正5年（1916）7月山室の妻機恵子が死去した。生前特に結核療養所設立の募金活動に尽力していた。その死後4カ月にして、国庫から1万余円の補助があり、豊多摩郡和田堀内村に第1期工事50人収容の、救世軍療養所が開設された。これ実に結核予防法制定に先立つこと3年、東京市立療養所の設立に先んずること4年、わが国最初のものであった。翌年末、津田梅子・河井道子らの募金によって、同所内に山室機恵子記念堂が建てられ患者の礼拝堂となった。(4)

そして大正6年（1917）第一次世界大戦中にもかかわらず、山室は約5カ月間に北欧・イギリス・アメリカ・カナダと第3回目の海外旅行をした。特に内務省の委嘱をうけて、戦時社会事業の調査報告書を提出している。これはのちに「戦時救済管視」と題し『救世軍士官雑誌』（第29巻2号～7号）に掲載された。これは満州事変・日華事変の際に大いに役立つこととなるのである。

第一次世界大戦が終ると、わが国に恐慌をもたらし米価が異常に高騰した。富山県中新川郡西水橋町の主婦 300人に端を発し、8月3日ついに暴動化、9月中旬までに1道3府38県に70万人以上の全国的大騒動に拡大するという、わが国未曽有の米騒動が起った。内務省は新聞に掻擾の報道を禁じたが、ついに寺内内閣は総辞職した。

原新内閣は国防充実・教育振興・産業奨励・交通整備を掲げる一方、公設日用品市場を開設するなど、生活安定の施策を図り、またわが国に公的社会事勃業興の気運を迎えることとなったのである。救世軍は直ちに東京府知事井上友一の協力を得て、米廉売所9カ所を設け、約 1,580石を取扱った。また翌年東京府慈善協会の委託によるセツルメント「社会植民部」を本所区柳島に開設、大阪にも「希望館」（西区泉尾）につづいて東野田に「女子希望館」を開設した。

この時期はわが国社会事業の組織化が急激に進み慈善協会・方面委員制度・児童委員制度・セツルメント運動の興隆期であった。(5)

わが国の社会事業成立の第二の契機となったのは関東大震災である。大正12年（1923）9月1日東京・神奈川・千葉・埼玉・静岡・山梨・茨城の各府県にわたる広範囲の災害は、わが国の壊滅であるとさえ報じるものもあった。もちろん救世軍にとっても甚大な損害をうけた。その詳細については山室自ら『大震災後の救世軍』（救世軍出版部・大正14年）に記しているが、神田の本営・中央会館をはじめ病院（下谷）、労働寄宿舎（浅草月島）、社会植民部（本所）それに市内各軍営もほとんど焼失した。また有力な士官も失った。しかし翌日には直ちに救世軍士官学校（牛込区市ケ谷）に仮本営を移して、罹災市民の救援活動を開始したのである。

慰問運動　塵紙・手拭・シャツ・毛布・米・味噌・醤油などの食料・日用品をもって市内バラックに一時収容されている罹災者慰問、約15万人。

隣保事業　芝離宮・日比谷・九段・上野・青山外苑の5カ所のバラック内に居住し巡回・診療・助産・その他相談に応じた。また幼児・老人約3万人に牛乳を配付した。

児童保育園　芝離宮・九段・上野に幼児保育を開始した。

救療事業　病院焼失跡にバラックを設け診療・相談を開始した。外来約29,900人。

職業紹介　浅草区黒船町・京橋区月島に職業紹介所を設け府・市と連絡斡旋した。

労働寄宿舎　独身労働者専用のバラックを月島に建て、毎夜約100人を収容した。

外国人救済　このほか横浜・横須賀に士官を派して、それぞれ外国人専用のバラックを設け、救済にあたった。

このような救援活動に対し、アメリカ救世軍日本入部から男7人、女2人の救護班を編成して来日し、協力して救療活動をおこなったほか、

アメリカより
衣類毛布・ミシン・自動車2台・タイプライター7台・古着76箱・薬品・古着27俵・石鹸・古着30俵・荷物自動車3台・食料品・古着50屯

カナダより
古着5屯・その他

イギリスより
毛布1万枚・衣類その他

合計見積価格　201,100円

これらは救世軍のみの取扱であって、その活動は到底他の団体の及ぶところではなかった。

〔註〕(1) 山室軍平著『救世軍略史』前掲
(2) 山室軍平「日本の救世軍とは何乎何を為しつゝあり乎」『ときのこゑ』大正2年
(3) 同　上

(4) 山室軍平著『山室機恵子』 救世軍出版部 大正5年
(5) 吉田久一著『日本社会事業の歴史』 勁草書房 昭和35年

5．日華事変と救世軍

大正14年（1925）6月、山室軍平は18年間の長期にわたる日本救世軍書記長官の職を解任されて、ロンドンの万国本営勤務となった。翌年3月少将に任ぜられ日本の連立司令官となった。東洋人としては最初の将官である。帰途アメリカ経由1年振りに帰国した。その間16カ国を巡り、彼の見聞を広めるのに非常に役立った。内務省での欧米視察談は「最近欧米社会事業概観」として『社会事業』（第10巻6号）に掲載された。12月には名実ともに日本司令としてますます「驚くべき組織者・経営者」としての敏腕を振うことになるのである。(1)そして直ちに救世軍最高会議の一員としてロンドンへ行った。このようにして山室は前後9回欧米に出張している。当時の交通事情からみて、これは大へんな活動である。昭和5年（1930）にはついに中将に昇進した。まさに最高の地位である。

昭和に入ると、わが国の社会問題・労働問題は深刻化し、昭和3年(1928)2月の第1回普通選挙では無産諸派から8名が選出され、政府に大きな衝撃を与えた。これが特別高等警察による国民思想の取締り強化となった。それはまた慢性的不況と相俟って、国民の気持を暗くしていった。昭和5年1月の金輸出解禁は、11月に起ったニューヨークの恐慌が全世界に波及するに及んで、日本経済は深刻な影響を受けることになった。昭和6年9月ついに関東軍による満州事変の勃発となり、それから足かけ15年、日本を完全に支配するに至ったファシズム体制の、暗い谷間へつき落されていくことになるのである。昭和7年5月、国家改造を夢みる陸海軍将校らは、犬養首相を白昼官邸に襲ってこれを射殺した。これは日本政治史上の大事件であるばかりでなく、政党政治の終焉を意味した。

昭和6年（1931）救世軍療養所に1万円の御下賜金があり、恩賜病棟を増設して、ついに200床の収容能力となった。昭和7年には東京府社会事業協会の委託による無料宿泊所更生館を城東区砂町に、また翌8年12月東京府委託で水上無料宿泊所を開設、伝馬船4艘で約200人を収容した。また上野駅正面北入口に「救世軍旅客の友係」をおき、2人の女士官が家出少女のために相談を開始した。これらの活動に対して、岩崎小弥太男爵（三菱合名）は、

毎年 8,000円づつ5年間、救世軍社会事業に寄付を申出た。

昭和8年10月児童虐待防止法（法第40号）の実施に伴って、麻布区広尾町に「芥種寮」を開設し、約30人を収容したが、昭和9年（1934）4月、群馬県吾妻郡草津村に癩未感染児童保育を開始し、9月には定員50人の「二葉寮」を新築した。

同年7月、大森区調布嶺町に失業者救済、農業植民の目的で、東京府は労働訓練所を設置し、これを救世軍に委託したので、蒲田区下丸子付近多摩川沿岸に約2丁歩の土地を得て、半年間に約50余人を収容した。このうち10数人は満州移民を希望し、昭和11年には興凱湖の近く密山に数次にわたって入植した。

同年9月21日は、関西特に近畿地方で、死者 2,500人、被害総額10億円に達する大暴風（室戸台風）があった。救世軍では翌朝直ちに握飯の焚出しをし、25日までに約32,000個、その後1週間に約3万人に給食をおこなった。この年12月に大森区に「救世軍機恵子寮」を新築し醜業婦救済を、翌年1月には世田谷区松原町に「世光寮」が新築された。これは昭和8年4月から施行の少年教護法（法第55号）による少女の教護をおこなうためであった。(2)

その頃から山室は急激に健康を害して、動作も不自由になったので、昭和10年（1935）2月司令官を辞任して顧問となった。これは今まで救世軍にはなかった制度である。ところがその翌年初め頃から、救世軍内部の少壮士官のなかから体制批判が起り、改革を称えるものがあった。そのため再び司令官に就任し、全軍の同心一致を強調した。

昭和12年（1937）7月、ついに日華事変が勃発した。救世軍では直ちに応召軍人家庭を訪問し、救世軍家庭団員が陸軍病院に奉仕した。10月1日の『ときのこゑ』には「時局に対する救世軍の指導方針」を掲げ、11月北支河北省石家荘に「救世軍報国茶屋」を設置し、瀬川大佐補らを送った。ここではお茶・ビスケット・しる粉の接待をするほか、新聞・雑誌の閲覧、常備薬、理髪奉仕そして軍人の写真を撮影して郷里に送るなどのことをした。石家荘からさらに徳川・済南にも戦線の前進とともに移動した。(3)

昭和13年1月には再び司令官を退き顧問となった山室軍平は、昭和15年（1940）3月13日、震旦麻痺に肺炎を併発して68年の生涯を終った。このとき救世軍が実施していた社会事業としては、(4)

労働寄宿事業　自助館(京橋区月島東仲通)、努力館(荒川区三河島町)、民衆館(横浜市中区浦舟町)で宿泊者年間平均延35,000人、横浜44,000人、ほかに冬季間のみ箱船屋（足立区桜木町）年間延 5,500人を収容した。

釈放者保護　労作館(牛込区赤城下町)年間延 2,673人、一時保護85人。

少年少女保護　希望館（大阪市大正区北泉尾町）男のみ定員23人。世光寮（麻布区広尾町）少女のみ定員40人。女子希望館（大阪市北区野田町）定員13人。

婦人救済事業　廃娼部（神田区神保町救世軍本営内)年間取扱 380人、東京婦人ホーム（麻布区広尾町)、定員20人。大連育児婦人ホーム(満州大連市播磨町）育児定員63人、婦人定員20人。

隣保事業　救世軍社会植民館（本所区太平町)。愛隣館（大阪市西成区中開２丁目)。

医療事業　救世軍病院（浅草区北三筋町)外来年間有料延 125,000人、無料延22,600人。西新井診療所(足立区本木町)外来年間有料延11,200人、無料 2,900人。新潟診療所(新潟市古町通)外来年間有料延 2,900人、無料延 1,400人。

結核療養事業　救世軍療養所(杉並区和田本町)入院年間有料延20,300人、委託延56,900人、無料延16,100人、250床。清瀬療養園(北多摩郡清瀬村）年間有料延 9,200人、委託延18,200人、無料延 5,200人、155床。

警察及び刑務所訪問　女士官が警察及び刑務所を訪問し、主として売笑婦・犯罪者の救済にあたる。

旅客の友部　女士官が駅に出張して婦人の保護にあたる。

人事相談部　救世軍本営内に設け、あらゆる相談に応ずる、年間 1,200件。

学生寄宿舎　救世軍村井学生寮（牛込区市ケ谷本村町)収容定員35人。

被虐待児童保育事業　機恵子寮（大森区上池上町）定員40人。

癩未感染児童保護　二葉寮（群馬県吾妻郡草津町）収容定員50人。

歳末救護運動　歳末に餅の廉売を東京市内35カ所、東京以外全国54カ所。

台湾における教育保育　台北市内４カ所日本語講習所を開設、１カ所

平均 150人の男女が受講した。

その他　社会植民館内に出征軍人遺家族託児所を開設、毎週2回家庭団員の陸軍病院慰問奉仕をし、北支済南には日本救世軍報国茶屋、現地人のための済南日語講習所及び救世軍済南診療所を開設している。

このように当時の民間団体として可能な事業はほとんど網羅しているばかりでなく、常に独創的・実験的・臨機応変に事相に対応しているところに救世軍社会事業の特質をみることができる。

〔註〕 (1) 竹中勝男「福音の社会的行者」『社会事業』 昭和12年
(2) 山室軍平編『第四十年を迎えて 付救世軍事業報告』 救世軍出版部　昭和10年
(3) 植村益蔵編『支那事変と救世軍 付救世軍事業報告』 救世軍出版部　昭和14年
(4) 植村益蔵編『山室軍平の面影　付救世軍事業報告』 救世軍出版部　昭和13年

結

山室軍平の死は、わが国の救世軍に大変革を余儀なくされた。その著『平民之福音』は葬儀の前日発行を停止され、幹部数名は東京憲兵隊本部の取調べを受けた。昭和15年9月1日号から『ときのこゑ』は『日本救世新聞』と改題され、昭和17年からは『朝のひかり』となった。また機構の変更を強られ、ついに日本基督教団に合同し、救世団となり、社会事業部は日本基督教愛隣会となって、昭和21年(1946)9月救世軍再建までつづくのである。(1)

救世軍の社会事業という標題からするならば、もちろんそれは今日に続くものであるが、山室軍平とのかかわりについて述べることで、一応この稿を閉じたい。

救世軍の事業は大別して戦場部と社会部とに分けられる。戦場部とは伝道部で、樺太から台湾・南満州まで約 200の小隊・分隊を設け、日夜救霊運動を営む。同時にウイリアム・ブースが「救世軍に於ては、救霊事業にあらざる社会事業なく、社会事業にあらざる救霊事業はない」と言っているところに、その本領がある。

また山室軍平も飢えにつきまとわれながら苦学した青年時代から「人の

生くるはパンのみにあらず」（マタイ4.4）という教えにも疑問をもち、パンもまた必要ではないかとの思いが去来する。そこに救世軍との出会いがあり、果断な実行力と独創的機敏性をもって「救世軍の山室か、山室の救世軍か」といわれるほどにその発展を齎したのである。

わが国の社会事業発展史上、山室の果した役割は大きい。しかし貧弱な社会保障体制の、しかもボランテイア気風の乏しいなかで、山室はどこからか資金を調達してきては、飢えた民衆の口にパンの一片を突込んでやろうとするのである。ある人は「救世軍は僅かな補助で働かされ、利用されていた」という。たしかに救世軍は、このような社会の矛盾を生みだす機構自体を追求しなかったし、そこに限界があったにせよ、なりふり構わぬ社会事業への情熱は、多くの知識人をして、運動の本質を考える無言の提言をしていたともいえるのである。

今日わが国の社会福祉事業の分野において、民間団体の役割が再評価されようとするとき、救世軍の社会事業と山室軍平のはたした足跡を、正しく理解する必要があろうと信ずるのである。（46．11．30）

〔註〕 (1) 秋元巳太郎著『日本における救世軍七十年史』 第3巻 救世軍出版部 昭和45年

in the target language, the complexity of that structure can be measured. In the case of English and Japanese, such an analysis of certain structures indicates that a negative sentence is more complex than a non-negative, that interrogatives are more complex than declaratives, and that the complexity of the WH- question form is dependent upon the element in the sentence being questioned.

The Social Work of Salvation Army in Japan and Gumpei Yamamuro

Akira MIYOSHI

It is known that Gumpei Yamamuro, an excellent organizer of Salvation Army in Japan, succeedingly adopted the new policies for social work in Japan. We can easily find that some of them could be carried out only by the Army. At the same time it should be worthy of notice that the fulfilment of the Army's social work was led by Yamamuro's love for mankind as well as his originality for the work.

Casework and Counselling (II)

Yoshihiro OHTA

- On Unification and Characteristics of Casework and Counselling -

In Casework and Counselling (I) I did mainly the comparative study of casework, counselling and psychotherapy. Here I try to point out the characteristics of casework with reference to Richmond's viewpoint as the background and its evaluation. The characteristcs of casework is studied through one actual case for the purpose of emphasizing this new viewpoint.